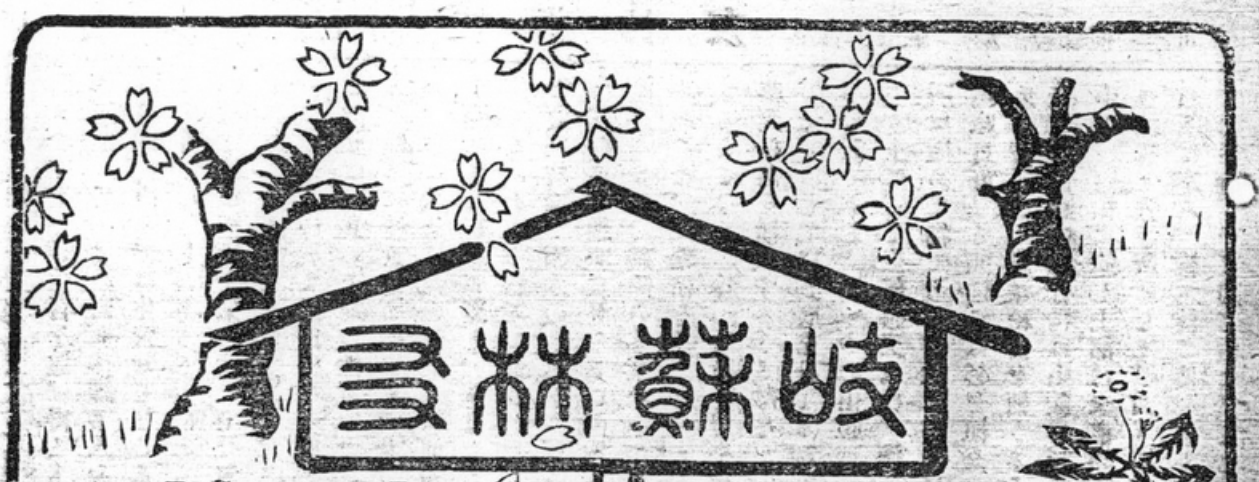

目次

□研究　樹栽地と樹種との關係に就て
□隨筆　後の一年有半　母校訪問記
□調査　青森大林區管内に於ける森林勞働　農科大學林學科造林
□通信　林木種子鑑定法　綿城の下から　東京赤坂より
□文苑　和歌
□彙報　學校便り　會員異動

大正八年五月廿五日　第百十五號　毎月廿五日定期發行　（明治四十四年六月十四日郵三種郵便物認可）

研究

樹栽地と樹種との關係に就て

西澤生

時運の進歩と共に林業思想大いに發達し、到る所植林を行ふものゝ增加せるは邦家のため慶賀の至りに堪へざる次第である。然れども其の植栽せられたるものを視るに、往々其の植栽地に對し、適當なる樹種を植付けせざるもの、並に地力に應じ適當なる距離に植付けせざるもの又は之れが植付に用ひられし苗木の大さ並に發育力の不同なるもの、其他種々の關係あるものを植付けせるため、加ふるに植付後の托育方法充分なざるため期望の最大利益を收め得ざるのみならず、折角の美擧も美擧とならず徒勞に歸し、笑を後世に殘すに過ぎざらんことを憂ふ是れ天與の福祉を放棄する譯で林業經濟上誠に遺憾とする所である。

今更に云ふ迄もないが、林業は永き年限後に始めて收益あるもので、中途之を變更することは困難である、若し强ひて之が實行に着手せんとせば實に多大なる經費と時間とを要し、多大なる犧牲を拂はねばならぬが故に、植林せんと欲する者は、先づ實地の調査方法を講ずる事が必要で、本邦數百の樹種中如何なる種類を撰定すべきか、將た又如何なる方法を以て之を植栽すべきか、例せば其の植栽せんとする土地につき充分なる調査を遂げ、之に適する樹種、植付距離等を定め、苗木の大さ及び發育良好なるものを撰び其の植栽後の手入保護に注意するにあらざれば充分なる利益を得られざるものである、就中植栽地と樹種との關係は著しきものなるに依り、本題に就て卑見を試みんとす。

却説、植栽地に對し適當なる樹種を植付けせざるとは、例へば一等林木なる杉扁柏等の充分生育すべき見込ある土地に二等林木なる落葉松、赤松等を植付くるとか、又は土地乾燥し地力充分ならざる土地に杉樹の如き濕氣多きを好み且つ地味良好なる所にあらざれば、完全なる生育をなし能はざる樹種を植栽する等を云ふのである、又土地は場所に依り性質及び地力を異にするもので、例へば甲所の林地は土壤の性質一般に緻密にして且つ濕氣に富むこと多きに反して、乙所の土地は輕鬆にして乾燥し易き等〻差異あり又同一の山に於ても谷に近き所は土性壤土質に近く水分の滲透良く且つ朽土に富むも、山嶺に近づくに從ひ漸次粘土質に變じ水分の浸透充分ならず、故に土地は場所により性質及び地力一定せざるものなるに依り、故に之に植栽すべき樹種も亦其の土地の性質の異なるに依り一樣に

すること能はず。元來樹木は各適地に於て、始めて完全なる生育を遂げ得るものにして不適地に於ては如何に体護手入を施すと雖も或る程度までは生育せしむるも、完全なる生育をなさしめ得るものにあらず、尙ほ換言すれば植林事業は主として氣候と土地との二つの天然力に依るものなるを以て、一つの土地に於て最良好なる成績を擧げんと欲せば、其の土地の性質地力を調査すると、同時に植ゑんと欲する樹木の性質を究め、茲に始めて此の土地には何が適するとか適せずとかを判斷し、適當なる樹種を植栽するにあり。然るに世間には往々土地の性質は勿論、樹木の性質をも顧みず、雜木伐採跡地の地味良好なるにも拘らず松苗を植ゑるとか、殘餘の落葉松苗があるから、彼地に松、落葉松を植ゑんなど、何等考慮することなく、谷から嶺まで全部松苗又は落葉松苗を植栽すること尠からず、斯くの如くにしては到底充分なる利益を得るは不可能である。又一つの山腹地に於て下部より上部まで全部杉又は松に適すると云ふ所は極めて稀である、故に多くは下部又は地味良好なる凹地には杉を植ゑ上部の稍々地味瘠惡なる所は松苗を植うることあり、例せば普通の場合には山麓は杉に適するも中腹は扁柏に適し上部は大概の土地瘠惡且つ風當り强き所にして、人工植栽に適せざる所は寧ろ、雜木林の儘、殘し置く方反つて利益なり、又同じ山に於ても南面及び西面の地は概して多量の陽光を受くること多きにより、東面及び北面に比し常に濕氣少なきを以て杉よりも扁柏又は松に適す 然るに往々植付苗木があるかち、又世間の一般に杉苗を植ゑるからとて、土地の性質。地力の何たるをも調査せずに植栽することは、實に林業經濟上不利益なることなり。例へば其の土地に適する扁柏を植ゑたならば五十年の曉には壹町歩參千圓の價値を有する林木を得らるべきに、適せざる杉苗を植ゑたるため、完全なる生育をなさず、五十年の後に其の價値千五百圓にも達せざることのり、故に最初の不注意の爲め伐期に於ける收入が約半分にも達せざるが如き大なる損失を招くことあれば、土地に對し樹種の撰定は大いに必要且つ大切の事である

而して何樹が如何なる土地に植うべきか又山の何所までは杉苗を植ゑて差支へなきか、何の邊よりは扁柏でなければならぬと云ふことは各土地〳〵にて一定せざるものなることは前述の如くにして、一つの山に於ても全く杉に適せざるあり、或は地力甚だし土も杉に適することあり、或は五割以上も衰へ居る所にありては、杉苗は勿論扁柏苗にも見込なく、松苗なれば容易に生育すると云ふことあり、されば植栽地に關しては通常標準とする所は次の如し。

北面の凹地又は谷に沿ひ濕氣多量にして地味良好なる所即ち地位より云へば一等地二等地の如きには杉苗を植ゑ、其の上部或は南面にして地味良好にして稍乾燥せる土地には扁柏苗の植栽可なりと思ふ。尙ほ土壤の性質より云へば杉苗は砂質壤土又は壤土に適し、扁柏苗は杉苗よりも稍々細き土壤を好む。松苗は杉扁柏等の植栽見込みなき稍々瘠惡の地にも良く耐ふるものである尤も松苗を土地良好にして杉にても完全に生育すべき如き土地に植栽すれば、瘠惡地に植付くるよりも、更に良好なる生育をなすは勿論なるも、松の如き二等林木を植付くるは林業經濟上不利益なる所以である。又是れは信州地方には殆んと關係を有せざるが、例へば樟の適地を選ぶことは、最も困難にして該樹に適する土地は暖帶にして此暖帶に於ても極めて少なく即ち南面又は東面にして海岸を距ること餘り遠からず海拔も餘り高からざる所にして、土質は粘土質若くば壤土にして深く、肥沃なる所が適當と思はる。

之を要するに造林事業は年一年に發達せんとする傾向を有するは、斯業のために歡喜に堪へざる所なれども、前記の如き其の事業にして往々悲觀的成績を目擊するに至りては、轉々慨嘆に堪へざる所である。故に其の實行に當りては豫め愼重の調査を遂げ、將來遺憾なき適當の方案を立てゝ着手せられんこと肝要ならんと所感を述べたる次第である。(終)

隨筆

後の一年有半 (承前)

於白頭山麓 坂本光太郎

□冷き下宿生活

同宿者は十人ばかりであるが、それは主に府廳、稅關、營林廚、郵便局、小學校、銀行、木材會社等へ行くもので出勤時間は大抵午前九時乃至九時半から午後の三時乃至四時迄であるが當會社は村役人樣とは違ひ殊に創立の事とて土木、建築、工務、山林の各係は測量、設計、製圖、豫算等、事業の準備に忙殺され日曜も休日もなく、降つても照つても毎日午前の七時より午後の七時迄會社に繫がれたのであつた。

時計が七時を打つとそれを待ち構へて居たといふやうに、ばた〳〵と卓子の上を片付けて各自さつさと家の方へ歸つて行つた。それはまるで時計の振子のやうに正確で規則正しい生活であつた。如何なる日でもこの單調な規則的の運動には狂ひがなかつたどんな喜に意識が占領されて居ちうと、眼が何處へ向いて居ようとも無意識の間に足だけはきつとおなじ處を下宿から會社へさうして會社から、下宿へ、この一筋道の外には通るべき道がないかのやうだつた。だん〳〵日足が短くなるに伴れて寒氣も嚴しくなつて來た。各官廳其他の勤務時間は午前九時半より午後四時迄となつたが、當會社は依然として變らない。朝は電燈のとまつて居る頃より起き出でゝ彼等書旦那の高鼾を耳にしながら出社した。

時間が來れば會社は人々を收容し、午後の七時を打つと會社は人々を追ひ出した、外の人達は皆歸るべき家がある、そこには若い美しい細君が待つて居る、可愛い子供が待つて居る、たゞひ其處には人それ〴〵の苦しみや悲しみがあらうとも兎に角それは彼の家庭だ、苦しみ悲しみと一緒に樂しみと慰めとがある？けれども俺には何がある？何が待つて居るのだ、俺の下宿には溫土爐部屋の薄暗い下に火の無い火鉢が待つてゐるのだ。

同宿の彼等は既に湯より歸つて夕飯を濟し或は散步に、或は讀書に一日の勞苦を慰めた後である。

自分はこれから錢湯に行き、垢水に浸り食事を終へる頃は守備隊の消燈喇叭が鳴り亘り一日の疲勞を醫す間もなくヴアイオリン位を引き鳴らして耳を樂しませ、新聞雜誌もそこ〳〵に眠りに就くが常であつた。

俄かに生活狀態が一變したので初めの間は隨分苦しかつた。殊に友人が遊びに來て呉れ夜更けて眠りに就く時などは、明朝の起床を氣づかひ女中に起して呉れる樣に賴んでおいても是れまたなか〳〵の煩坊助であつて起して呉れたためしなさ、處が明日が日曜と休日とかになると、八時頃迄も朝寢をするのが此の家の例で何時も僕が起して遣り、生臭ひだし雜魚の香のする味噌汁でばら〳〵の昨夜の殘飯に澤庵を嚙つて自動機械のやうに壁にかけてある洋服を着て出勤するのであつた。

是れでも一ヶ月十九圓の下宿とは驚くちやないか、吁！無意味落莫なる「チョンガー」生活よ！

こんな具合で自分は終に不眠症から、神經衰弱となつてしまつた。

□達磨の目玉

たつた紙一枚で免職と來る吾々月給生活の人間ほど憐れなものはない。仁王S君は或事情のために讒言され營林廚を去らなければならぬことなつて、僕と同室に下宿して居たがこれが僕に慰安を與へて呉れる唯一の友人であつたが、明日は歸鄕の途に就く事となつたので、吾々數名の者が其夜或る料亭に於て會合をなすことにして下宿を出て料亭の一間に通つて一時間も待つたが他が忙しいためか容易に此方へ料理〻運んで來さうな形勢がない……

あまりの退屈にあたりを見直すと床の間の大きな達磨の掛軸に目がついた。凸坊かはる〳〵其の目玉を卷煙草で燒き拔いた……

……すると達磨の兩眼は白く光ると同時に一同ドット笑ひ崩れた。其の時入口の襖が動いた！其處に現はれた女將の目ン玉がおそろしく光つた……

□悲しき離別の涙

翌晩S君をステーションに見送つた。

發車時間迄にはまだ少し間があるので、前

の廣場でも散歩しようと、二人はあたりを逍遙したがこれが最後の別れだとおもつたときには何ともいへぬ悲しさ寂しさが胸に迫るのを覺えた。二人は直ちに堅く手を握り合ひ無言のまゝ見合す眼と眼にはいつしか露が宿してをつた。

二人の別れを悲しむ如く月もおぼろであつた。やがて發車の時間も來たので、プラットホームに上つたがS君は成る可く人目を避ける樣に力めて居るのを見て、ひそかに同君の胸中を察し氣の毒でならなかつた。發車の間際にS君は余の頸にネクタイを捲きつけて「これをかたみに君に遣る！必ず忘れて呉れるな！」と肩に手を懸けた。僕は「何處に在つても身を大切にして度々便りを聞かして呉れ！僕は君の成功を待つてるよ！」と涙ながらに斯うした別れの言葉を殘して釜山行きの列車は憂鬱に充ちたS君を乘せて、凄ましい音を立てゝS君を余から奪ひ去つてしまつた……

「氣車は出てゆく煙は殘る
殘るけぶりが……」

とかいふ俗謠もあるが暫く自分はプラットホームに立つて列車を見送つたが、囂々たる列車の響も漸次遠ざかり只列車の後にある信號燈が眞紅に物凄く光つて居るのが見ゆるのみであつた。

軈てこれも暗の中に消ねてしまつた。

一陣の寒い夜風が襟をかすめて吹いた。ハツト我に還り四邊を見廻すと何時しか其處には人影はなかつた。……

聞けば彼S君は其後流れ〳〵て今は樺太に在りと云ふ。

□晩餐會

王子製紙株式會社より藤原專務が來任され其の夜社員一同は第二綠新館に於て開會の晩餐會に招待された。

會場は二階の大廣間にて正面の大きな床の間の前には福々しい專務がニコ〳〵として座を占められ其の左右には數人の重役連が控へられ兩列には各係長の技師等の面々其他の雜兵以下順次控へ並ぶこと三十二名。一同着席し終るや專務は滿足の態にて次の如き挨拶をせられた。

「坐つた儘で失禮ですが皆さんをお招き申しても別段何も御馳走はありません、が然し今晩は御遠慮なく大いに飲み大いに喰つてゆく、おいに歌つて貰ひたい。而して働く時も御遠慮なく出來る丈けうんと働いて貰ひたい。私は何事にも遠慮する人は嫌ひです。然しながら事物の輕重大小を問はず各自責任を重んじすべて經濟的にやつて貰ひたいのが私の希望です。其のおつもりで」

挨拶が濟むと一人に一人づゝ配布されたる窈窕たる佳人は一同銚子を取り擧げ酌を始める。

極彩色に飾り立てたる四、五人の雛妓が賑かな三味の音に連れて廣間の中央で銀燭の下に艶を競ひつゝ手躍を始める。

山海の珍味は山をなし美醇湛へて海をなして居る。一座は盃の交換ですつかり陽氣になつて來た。殊に專務を始め重役連は諸方から集まる杯の處置に窮して居た。

終りに專務からの所望により一同鴨綠江筏節を禮として解散した時は將に十一時であつた。

□轉動命令！

いつしか十一月もすぎて結氷の十二月となつた。新義州の地は堅く凍つて寒い〳〵身を切る樣な風が吹き荒ひ朝の氣温は實に零下二十七度といふ十日の午後七時であつた退社せんとする時に當つて突然「君はあさつての晩此處を發つて山の方（咸南甲山郡普惠面明化洞五溪水作業所）行つて貰ひたい」と轉動を仰せ付けられた。おもはざりき此の急なることを！

十日や二十日の出張とは違ひ、又內地の旅行や山奧とは異り殊に寒い時の永い旅行であるから充分防寒の準備も必要であり轉動といへば荷造りもあり、それに自分は新義州も一夜宿りの所でなし友人、知己もあり其他色々い用件もある身であるのに、あさつての晩とは少し無理なやうにもおもはれたが承知の旨を答へて引下つた。

翌日の午前中は出勤し午後は安東縣に赴き防寒の準備をして歸り十二日荷造りて暇乞ひに目を廻し午後七時寒い夜風の吹く中を寂しいおもひを抱いてステーションに車を走らした。

幾度か〳〵此の驛に色々の人を見送り又出

迎へたが世の中を何にたとへん飛鳥川昨日は人の身の上も今日は我が身にふりかゝる苦樂不定の慣ひとて……と浪花節にもある如く昨日は人の身上も今日は我が身が送られる番となつた。

午後七時四十分釜山行きの列車にて萬歳聲裡に住みなれし思ひ出多き新義州の地を發した。過行く各驛々の燈火は々皎と僕の長途の旅を送るかの樣であつた。

明くれば十三日朝京城南大門驛着、都の空氣も暫く吸ひ收めとおもひ一日滯在と決定した。京城とても隨分寒くて水道の水が凍つて上らないといふ騒ぎである。今時山行きはお止しなさい、死んでしまひますよの宿の女將の言葉も後に翌日南大門驛發元山に向ひ翌朝大阪商船安平丸にて元山港出發

□物凄い船の一夜

此處にも寒風は吹き荒れて沖には逆浪躍りて山をなすのが見ゆるのであつた。元來海上の旅行に不馴れの吾輩は途中船暈の事なぞ考へて數多の人々と元山の埠頭から棧舟に乘り込んだのが十五日の午前八時であつた。

丁度元山の守備隊が咸興へ引き上げる時で澤山の守備兵と一緒になり舟は大混雜を極めた。

空に往き來の雲は足早く千切れ飛び强風波を煽つて韡韜たりであるが一旦乘り出した船今更戻す譯にも行かず行く先々の事をくよ〳〵と考へて居る中に船は早や錨をあげて進航を始めた。

まゝよ運を天に任せ身を二千五百噸の安平丸に委ねてゆける所までいつて見よ、死ねば諸共だと獨り覺悟の臍を固めてはみたものゝ恐怖の念は依然として絶ねなかつた。

食卓では海上旅行者の經驗談や遭遇せし辛苦談などあつて一しきり食堂は賑つたが、其の內に海荒はます〳〵激しく船の動搖がだん〳〵高まつて來たので一人減り二人減り吾輩もいつしか狐鼠々々と床中へ避難した。船搖で吹き鳴らす喇叭が十二時を告げた。西湖津の沖合を過ぐる頃風は刻々に烈しくなつて來る。波の盤紆は愈々高くなつて來た。俄かに船員が右往左往の只ならぬ響動。甲板では高い痢走つた聲で命令でも傳へるやうな叫びが聞ねる。舷側に吊してあつた梯子が怒濤に揉まれて押し潰すやうな軋の音が聞ねる。船はさながらに波間に投じた木の葉の樣に右に左に上に下に欣飜されるのである。怒る海風韡韜たる逆濤舷側も甲板もあらゆる窓は閉鎖されて了つたまぎれもなく船は今魔もの、低氣壓に襲はれて居るのである。

魔ぞ狂ふ海水は韡韜として中甲板を洗ひ船橋を越ねてその物凄い事といつたらたとへやうがない。吾等の乘れる船は恐るべし、今巨濤の深底を潛航するに均しいのである。これが爲めに僕はすつかりまいつてしまつたのである。吐瀉すること前後四回に及んだ。乘客の多くはウリトハンカチであつた。

甲板に人影を見ない、かゝる時でも歩哨は肌を突裂くやうな寒風を身に受けながら蹌踉きつゝも、右手に銃を杖つき左手をブリツチに支へて立てるのを見受けた。如何に國家の干城とはいへ氣の毒に思はれた。

寢臺の上に縮かまり一夜を明かして十六日の朝八時頃、辛うじて新浦港に上陸し旅館に着いて朝飯を濟まして胸撫で下しやうやく安堵した。

沖に錨下をした安平丸は喘息するかの如く靜かに煙を吐いてゐた（未完）

母校訪問記

桑花子

四月廿八日月曜日　私は出張中公用の爲め西筑摩郡役所に行きました、序に汽車の都合で大分時間がまだあるのを幸久振りで母校を訪ねました、木曾谷の總てが吾々に深い印象を殘してゐることは勿論でありますが木曾福島附近は第二の故郷でもありますから停車場に下りて母校迄一直線に歩いただけでも種々の印象が頭の中に蘇つて來ました母校の中では彌更であります而し何時も多忙に追はれてかうした事も仲々書けませんか今日は丁度雨天外業は休みであり內業もありませんのでペンを握つて見たのであります、然し愚にもつかない事を書いて貴重な紙面を汚すのも本意ではありません只私の此訪問記によつて離れ〳〵になつて

ねを同期卒業の人々や一般の卒業諸賢の學生時代を偲び今の母校を想起することが出來たなら其所に一分の意義も認められませう、拙い筆の力を持つて此大きな望の万分の一をも達せられたらどんなに私は幸福か知れません、春來ることの遲いと云ふ木曾谷も最早爛漫の春は何時の間にか過ぎ去つて青葉若葉の瑞こしい色に一面覆はれてゐました、停車場から眞直に町の方へ下る坂道の左側には母校にゐる時分その影だに認られなんだ一握もある櫻の木がすうと町のはずれまで立つてゐました、私は先づ時の流れの早さとやゆみない自然物の生長を思つて卒業後五ヶ年間の自分の身をふと顧みました、私にも知らぬ間の種々の變化がやつぱりあつたのであります、八澤の橋の上から眺めた演習林の落葉松の若葉は昔と變らぬ鮮かな色を滴ちん許りに見せてゐました、母校にゐた時分唯一の娯樂場であつた倉野屋にも矢張り種々の印象が殘つてゐました、然しあの時分の樣に美味さうな菓子などはありませんでした、停車場の方か專門になつたさうであります、風月堂此の處も大分足繁く通つた娯樂場であります、店にはあの時分にもゐたおしのさんが大分大人めいて坐つてゐました、今も學校の人達が來るさうであります、神村書店も店の樣子は變つたが主人も主婦さんも相變らずの元氣でゐました、母校にゐた時分に出來た子供がやつと一人丈け大きくなつたさうで大分嬉しがつてゐました、而し其後も一人なくなつたさうでありますが、藤森書店も表の間口をひろげて大分立派な店になつて居ましたが、寄りませんでした、島崎藤村の小說「家」に出てゐる高瀨奇應丸の本舗關所跡前を通つて關所橋から向城に出ましたが此附近は大して變はつてゐませんでした、坂の中途にある饅頭屋の昔なつかしい匂かな鼻にうつりました、一度火災に罹つて慘々になつた古久助の土藏の前も以前の樣に暗い迄に樹木が茂つてゐました、御料局前を通つてあのきたならしい豆腐屋の前へ來ると一年後の卒業千田君にひよつくり出合ひました、千田君は今度西筑摩郡へ赴任する事になつたので今日新任の挨拶に郡役所へ行く所でした、君も大分變つてゐました、頭の髮が奇麗に分けられて紋附の羽織でしやんとした所はまがふ方なき若紳士でありました、積る話はつきませんがもうお互時間の余裕もたくさん無かつたのでそこで殘念ながら別れてしまいました、黑川渡の橋の上から見下した黑川の水は相も變らず淸冽に碧く澄んで小魚の群が西日の光に判然りと透いて見えてゐました、新開村の役場の下に巡査駐在所が出來て望岳臺下の落葉松も若葉の色美しく蒴出てゐました、よく硝子の箱と矢を以て魚をつきに出た又夏は晝と云はず夜迄も水泳の場所であつた演習林下淵も畔の樺の大木の影を倒に寫してゐまして、その傍の苗圃も土がかねされて奇麗になつてゐました、そこには自分達の汗も幾分はおちてゐる筈でせう「汗はだら〳〵流るゝを」と歌つた歌と共に當時が思ひ出されます、やがて正門迄來ると久し振りで故郷へ歸つた樣な押ねられない懷しさが一時に胸に浮んで來ました、實習服を着けた人達が二三人庭にゐましたが皆知りません玄關で草鞋をとつてそつと事務室を覗くと其處に恰度校長先生が居られました、校長先生は本年長野縣林業技術員會議の節長野で御面會して蘇門會の夜などは隨分とんだ所を見られてをります、挨拶の節の先生の微笑は私には其皮肉の笑にも取られた位でありました、私は懷しとのみゐくな挨拶もしませんでした、所へ西澤先生がおいでになりましたがもう私を知りません、私が名乘りをあげて漸くうなづかれて大分身なりが……とか云ひましたが變つたからわからなんだと云つて笑ひました、それから同じ火鉢をかこんで種々の話が出ました、母校へ來て舊師と會へば話は當時へ移つて行つてその時分の誰彼に就て現在を偲ぶのは當然の成行でありませう、今になれば當時の事は善惡總てが樂しい思出であります當時の先生と當時の學生だつた者とが一所になつて包みかくしなく其を語るのが樂しくなくてなんでありませう、暫くして島内先生がおいでになりました、あの時分奇麗に分けられてゐた髮の毛は何時の間には短くなつて其爲か大分やせられた樣に見られました、又二寸見別けがつかん位に見ねました、あの時分の先生で今母校にをられるのはたつた此三人の先生方であります、話は愈々面白くなつて來ました。

「君等より一ヶ年先のS君は今度縣廳へはいつたね」。「それから同期のN君も」「秋田に行つたM君はどうしたね」「今阿仁鑛山におられるでせう、あちらで養子に入つたさうぢやありませんか」それから矢張り同期のT君が此頃手紙をよこしたが」「あのまゝ群馬に居るでせう」「北安から來てゐた小さいK君は」「去年篠井で突然出合したが大分大きくなつて今高田で砲兵で勤めてゐませう」「驚いたね」「哲學好きのT君は」「軍隊式のT君は」「新潟縣の六日町にゐたM君は」「福島縣の方へ轉任しました」「北安の郡役所にゐる兩T君の其後は」「栃木縣廳にゐるY君は」「北海道のT君は」「T君の大の仲よしだつたそして同じ北海道にゐるK君は」「矢張り養子だそうで」「今實家にゐるO君は」「二年の後の卒業の長野小林區署にゐるF君は」「本縣廳にゐるN君は」「今度何處へか轉任したでせう」「同じくH君S君I君A君は」「北安のS君はどう〳〵なくなつたね」「岐阜から來てゐた數學の泰計I君万能のI君は」「福岡から來てゐたF君は」「岩倉で通つてゐたI君は」「埼玉縣のA君は」「詩吟好きの松本のN君は」などゝ殆んど話の切れ目かなかつたのであります。その人一人々々に皆種々の思出がゝちまつて一人手に微笑まれました。まだ〳〵〳〵ろ〳〵の人々について當時と現在とか話されました丁度一時間半ばかりの間であります。もう時間は午後四時にもなつて居ます。寄宿舍の方から苗圃の方までもまわつて見たかつたのでありますが先生方もお歸りになる私の時間も迫つて來て居るので盡きぬ名殘りを惜しみつゝ先生方と一所に門を出ました私共がこしらへ始めた果樹園の邊りは立派な庭になつて居ました。大場先生の事も浮んで來ます。ふりかへると演習林の末が霞にかすんで炭材とりに苦しめられた事から北村先生の事も思ひ出されました。其の時おこられた島内先生は今一所に歩んで居るのを思つてもなつかしさに堪べませんでした。口では尙ほ語りつゝ頭には尙ほ限りなき當時の追想を書きつゝ關所橋の上まで一所に歩いて來ました。そこで先生と別れて停車場に急ぎました。プラットホームから汽車に乘つてからも此の當時の追想は堪へませんでした。私は靜かに汽車にゆられながら目をつぶつて猶なほあの當時の思出を追ひました。—（八、四、三〇）—

調査

森林勞働（承前）

千村吉雄

第二章 青森大林區署森林勞働の量

林業は諸生產業中、最も天然に依賴することと多き事業にして、其勞働量の如き比較的天然に俟つこと大なる農業に比してさへ遙かに尠く、所謂勞働粗放の事業なりと云ふことを得べし

而して、青森大林區署が以上說述せる諸事業の遂行、並に、同署内に於ける森林經營上に必要なる勞働量を、精神的並に肉体的の二方面に分ちて調査する時は次の如し、

第一節 精神的勞働

署内九十五余万町歩の林野を管理經營せんが爲め、大林區署を林務、林業の二課に分ち、更に其下に庶務、會計、施業、利用、造林等の十二係を置き監督並に實行業の任に當らしむ、又管内を三十二小林區二百十六、の保護區に區劃し此れが施行實行に任ず、今これが所屬職員數をあぐれば次の如し

官名	林區署	大林區署	小林區署	計
山林事務官	二人	〇	〇	二人
山林技師	七	五	一	一二
山林事務官補	〇	一	一	一
山林屬	四〇	四四	八	八四
山林技手	六一	六七	一二	一二八
森林主事	〇	二〇六	二	二〇六
雇	六七	一三四	二〇一	
計	一七七	四五七	六三	六三四

第二章 肉体的勞働

前章諸事業遂行のために要する肉体的勞働量は甚だ多く今これを直接森林勞働に從事する者及間接に森林勞働に關係あるものゝ二種に分ちて揭げんに

イ、直接森林勞働に從事する者

1 施業按、林、小班の測量其の他、施業按編成の爲に使用する勞働にして最近三ケ年間の使用人夫數を示せば

年度別	種別	使用人夫數 延人員
大正五年度	平均	三、六七八人
大正六年度		三、七〇〇人
大正七年度		三、四四七人
平均		三、三七八人

2 利用

い 立木賣扣、立木のまゝ賣却するもの

年度	種別	人員	延人員數
大正三年度		三八六三	三〇〇六三
大正四年度		三〇〇六三	三〇〇九九
大正五年度		二九三、七九	三〇〇四
平均		三、九	三、一九

尙官行研伐事業に從事する定夫の現在數を擧ぐれば

杣頃 二八人

雜役(檢尺補助其他雜務に從事す) 五七人

計 八五人

は 製材事業 製材事業の爲現在使用する職工定夫數は、四八名にして、これが延人員一万七千五百廿人なり、而してこれ等は皆專業者のみなり。

に 森林鐵道 森林鐵道運搬のために要する勞働量を延人員にて示す時は、大約左の如し

線路修繕工夫	四、八四七人
線路工夫	一、四五三
職工	一、一〇五
職工手傳	八〇八
火夫	九二八
運材夫	八三六
薪延夫	六八四
電話工夫	三三五

ろ 官行研伐、官、自ら伐木造材を行ふに要する勞働量にして、其數甚だ多し、此れが勞働量を年度制に示せば左の如し

大正六年度	薪割人夫	二六三、九〇三
	割薪積込人夫	三、一九
大正七年度	線路雪除人夫	二六三、八〇〇
	番人	三、一〇〇
平均	計	二九四、一六一
		四、一九五

ほ 貯木場、貯木場使用人夫と森林鐵道使用人夫とは互に連絡を保てるものゝ如く其區別稍困難なるも凡そ次の如し、

檢尺補助	五九五人
丸太荷卸卷立人夫	二、一三二
卷立整理人夫	一一人五
構內整理人夫	五九七人
番人	五三一人
計	三、三二九人

以上森林鐵道及貯木場を通じ定夫人は定傭夫として一ケ年を繼續雇傭はるもの現に十九人あり

3 造林、造林事業に要する人夫數を年度別に示せば

年度	種別	人夫數 經常	特別	計
大正五年度		三〇五、三六〇人	三八、九九八	三五四、三五八
大正六年度		三四〇、〇〇九	二五三、三二四	五九三、二三三
大正七年度		三二二、八五〇	二〇六、六五二	五二九、五〇二
平均		三二二、六七	三二九、六二五	五五二、三九二

此等造林事業に使用する人夫は、總て地元定任の農民にして年々本事業に出張する人夫數は、

男 三二、〇二八人 女 一二、四〇三人

尙造林事業に使用する定夫としては大正七年度現在數を見るに

苗圃定夫	五四人
林野定夫	一四二人
林野巡守	三〇一人
乘馬巡視	九人
計	五〇六人

而して此等一人當り担當面積は林野定夫、六百十四町四反八畝、林野巡守、二百三十二町〇九畝、乘馬巡視、一千二百〇七町九段三畝なり

4 土木 前章に表示せるが如く土木事業に要する年々延人夫數は、十七万九千四百余人にして、大正七年度に付き、これが專業副業別を擧ぐれば

	專業	副業	計
延人員數	九一、九二三人	八七、五〇八人	一七九、四三一人
	五一	四八六	九九七

次に定夫としては從來土木事業が年內繼續して雇傭せる者極めて少なく、僅なる故直接人夫を使用することなく只處分、調査の爲め多少使用せざるにあらざるも其數極めて僅かなるが如し。

かに一〇二、に止まるべし

5 測定、測定事業のため年々に使役する人夫數は延人員にして凡千二、三百人なり、因に大正六年度に使役せるものは、千二百五十九人なり

ロ 間接に森林勞働に關係あるもの間接に森林勞働に關係ある者とは、大小林區署等に雇傭せる給仕、小使等の謂にして此れが現在數を示せば左の如し

巡視	二名
給仕	九名
小使	三九名
計	五〇名

以上同管內に要する森林勞働量の大略を掲げたりと雖も予が茲に述べしとする所は肉体的勞働中、直接森林勞働に從事する者に就てなり

而して直接森林勞働者數を以上述べ來れる所より再掲する時は次の如し

事業別	延人員	備考
施業	按 三、三六人	平均數
官行研伐	二九四、一六二	四、一九五 を示す
森林鐵道及貯木場	一〇、五五〇	一三五
造林	五三、三九二	男 三一、〇二八 女 一二、四〇三
土木	一七、四二一	九九七
測定	一、二六〇	七五
計	一、〇四一、一七三	男 三六、二六〇 女 一、四〇三 計 四九、〇二五

表は臨時傭人夫のみなるも尙定夫並に定傭夫を示せば

官行研伐事業	八万名
製材事業	四八名
森林鐵道貯木場	一九名
造林事業	五〇六名
土木事業	二名
計	六六〇名

以上森林鐵道及貯木場を通じ定夫人は定傭夫として一ケ年を繼續雇傭はるもの現に十九人あり

造林、造林事業に要する人夫數を年度別に示せば

年度	種別	人夫數 經常	特別	計
大正五年度		三〇五、三六〇人	三八、九九八	三五四、三五八
大正六年度		三四〇、〇〇九	二五三、三二四	五九三、二三三
大正七年度		三二二、八五〇	二〇六、六五二	五二九、五〇二
平均		三二二、六七	三二九、六二五	五五二、三九二

此等造林事業に使用する人夫は、總て地元定任の農民にして年々本事業に出張する人夫數は、

男 三二、〇二八人 女 一二、四〇三人

尙造林事業に使用する定夫としては大正七年度現在數を見るに

苗圃定夫	五四人
林野定夫	一四二人
林野巡守	三〇一人
乘馬巡視	九人
計	五〇六人

而して此等一人當り担當面積は林野定夫、六百十四町四反八畝、林野巡守、二百三十二町〇九畝、乘馬巡視、一千二百〇七町九段三畝なり

4 土木 前章に表示せるが如く土木事業に要する年々延人夫數は、十七万九千四百余人にして、大正七年度に付き、これが專業副業別を擧ぐれば

	專業	副業	計
延人員數	九一、九二三人	八七、五〇八人	一七九、四三一人
	五一	四八六	九九七

次に定夫としては從來土木事業が年內繼續して雇傭せる者極めて少なく、僅

一、發送月日

一、其他參考事項(產地、採取者、採取月日、其ノ他)

三、鑑定ニ要スル試量ノ最小數量ハ種子ヲ左記ノ如クニ分チテ各別ニ之ヲ定ム

第一級種子 カシ、イチフ、以上ノ大サヲ有スル大粒種子

第二級種子 クス、ハゼ、カヘデ、以上ノ大サヲ有スル中粒種子

第三級種子 スギ、ヒノキ、ニレ、ハンノキ、其他ノ一般小粒種子

(一) 種類ノ檢定

第一級 二〇〇粒以上、第二級 四〇粒以上、第三級一〇〇以上

(二) 實重、發芽率ノ檢定

第一級 二〇〇粒以上(但シ純率ノ檢定ニハ一升以上)、第二級、一合以上)、第三級 五勺以上

(三) 純率容量ノ檢定

第一級 一升三合以上、第二級、一合五勺以上、第三級 一合三勺以上

四、試料ハ種子ノ總量ヲ周密ニ攪拌混和シタルモノヽ中ヨリ採取スルヲ要ス

五、檢定ノ公差ハ次ノ如ク之ヲ定ム

(一) 純率

九〇%以上 百分ノ二

九〇%以下六〇%百分ノ三

六〇%以下 百分ノ五

(二) 發芽率

九〇%以上 百分ノ四

農科大學林學科造林々木

種子鑑定法

林學苗圃ニテ 今井徹郎

林木種子鑑定事項

一、林木種子ノ鑑定ヲ行フ事項左ノ如シ

一、種類(產地、變種(品種ノ鑑別ヲ除)

一、純率

一、容重

一、實重

一、發芽率

一、効率

二、鑑定用種子ニハ各個ニ付左記事項ヲ記載添附スルコト

一、檢定事項

二、送附數量並ニ個數

五〇%以上九〇%未滿百分ノ六
三〇%以上五〇%未滿百分ノ八
三〇%未滿　百分ノ十

六、檢定ニ要スル期間ハ左記ノ如シ
發芽率　試料受領後四十日
其他　試料受領後十五日

七、檢定ニ使用シタル種子ハ種類並ニ發芽檢定ニ使用シ再ビ發芽能力ヲ有セザルモノヲ除キ之レヲ返付ス

以上

通信

錦城の下から

歩三七ノ四　松島生

時和氣朗かに百花爛熳新鶯聲を弄ぶの候とは相成申し候、小生軍隊の生活に入り申し候てより早五ケ月目天晴武士の元服式とも覺しき第二期の檢閲も恙なく了へて茲に一人前の軍人に仕上げられ候、激しい肉體教練と嚴しい精神訓練とは青春の男子に取つては確かに良藥たることを告白するに躊躇不致候、身体が見る中にむく〳〵と肥ゑて來たりしも無精なりし精神が活々として來たりしも事實に御座候、小生は今軍隊の生活に入つたことを一大幸福として喜び居り候、目を開くと兵舍の窓際近く櫻花が垂れ花は櫻木人は武士といふのが如何にも深刻に味はれ申し候、扨京都師團は今回旭川師團と交替して滿洲守備の任に當ることと相成り本月中旬までに夫々出發致し候小生も之に參加して日露の戰役に滿土の露と消ゆるやもしれぬ勇士の英靈を弔はんと思ひ居り候へども意外にも大坂師團二十七聯隊へ轉することゝ相成今日錦城の下へ來り申し候吾々の轉は輕微なる事に御座候へども人心將に浮かれんとし百花先を競ふて咲き出でたる此の美はしさ故國の春を見捨てて重任の爲に殺風景なる滿洲の地に趣かるる吾々の戰友に同情せざるを得ず候

次に校友諸賢へは長との御沙汰に打過ぎ申譯無之候、諸賢には定めし新しい希望に向つて突進せられつゝあることと存じ候、折角御自愛あらんこと偏に祈上候　敬具

四月一日

はがき通信

在京城　本多生

京城は櫻花の滿開です今この爛漫の櫻花の下共に俱に樂しく暮して居るのは元母校の先生なりし伊藤門次先生及小生と大寶農林部京城出張所に居る征矢朴郎君と三人皆壯健で勤めて居ります

暴動は殆んど鎮靜し仕事上に支障を來すが如き事は恐らく無いだらうと考へて居ります

四月廿四日

樺太より

在大泊　甲田生

……當地はまだ〳〵隨分寒く降雪も時々にして內地より來着以來日猶淺き新米に取りてはほと〳〵閉口の次第に有之候……。

四月廿五日

東京赤阪より

小澤安親

謹呈

都鄙春韻滿ち春風春水長閑なる候と相成候折柄校長先生始め諸先生益々御多祥の段大慶至極に御座候小生儀入營以來頗る頑健に之無事第一期檢閲を了し候間乍他事御休心被下度候、軍隊の多忙多事なる爲遂御無音を仕り申譯無之候又隊の第五中隊に同じ志願兵七名にて何れも相當の教育あるものにて候中等程度の學校を終へしのみなるは小生等兩三名にて候

さはれ軍隊の成績は學問の高卑に無之今回一等卒を命せられし中にて小生は幸最右翼にて昇級仕り候足固より校長先生の御蔭と存じ不堪感謝候從來志願兵は聯隊の厄介者視せられ候由なれども漸々善解せらるゝ樣に相成候軍隊は一、精神二、術科三學科の順に候事なれば精神を鍛錬し軍人精神を躰得するを得ば入營の目的の半は達成せるれ候ものに候志願兵は寸暇を偸みて日々日誌を教營に提出するものに候凡そ文語体に候此は軍用文の練習の爲に候高等學校卒業者に於てすら充分よく日誌を書き得ざるものあり、日誌の成績は志願兵の第一期の成績の大半を占領する如く思惟され申候小生は志願兵として入營す可き在校生に充分漢文調の作文を練習す可く慫慂するものに候

入營前の恐怖に引き更へ目下の兵營生活は頗るゝ安きものにて其の人の心によりては

唯一の修養場にて候教官は常に我等に割ふらく「積極的に徹底的に熱烈火の如き生活をなせ」と申候、軍隊の多忙多事なる吾人に之を要求するもの多々萬々に候既に第一期を了して回想すれば萬事夢の如く唯身肉に確乎不拔の軍人精神の充實するを覺ゆるのみに候峻烈なる朔風は飴蕩たる春風に代り樹々百花を付し候、櫻花翼して皇國の榮譽を彌々高む可く傍々軍務に努力致す考に有之候先は久々の御無音旁々第一期終了の御報知まで斯如に御座候　頓首（校長宛）

四月七日

文苑

和歌

四月廿三日塚越先生のやどりに
花見しけるときよめる　安井正夫老人

惜みみるおのがこゝろやくみぬらん
　ちりがてにする山ざくらばな

花よりもなほなつかしきもてなしに
　はからず時をすごしてしがな

前年山田行者のやどりにて花見の時よめる

このやどは花のみならで月雪の
　ながめゆかしきところなりけり

岐阜市第一位の旅館今小町の玉井屋にやどり何かと設備の整ひたるをめでて主人によみ與ふ

いま小町玉井の水のきよければ
　まためぐりきてくまむとぞ思ふ

彙報

學校便り

○三溝書記新任　小幡書記逝去後久しく缺員中なりしが今回同氏の後任として三月廿三日就任せらる三溝書記は長らく福島小學校に奉職せられをりし者なり、辞令左の如し

三溝書記之

任長野縣立木曾山林學校書記（給六級俸）
命長野縣立木曾山林學校教授囑託

○新入生歡迎會　櫻花爛漫の節四月十八日の好晴を卜し遠足部春季大會と合併して新入生歡迎會を關山公園に於て開催す

春日和照萬朶滿開繚亂の老櫻樹下幔幕を四方に張りて席を定め笑多時一日の歡を盡して解散せるは午後三時頃なりき

○辞令

三月卅一日　月俸增給　小貫教諭
三月卅一日　同　沼田書記
三月卅一日　同　武居助手
四月十三日　九級俸下賜　西澤教諭
四月十三日　三級俸給與　佐藤教諭
四月十三日　七級俸給與　塚越教諭
○辞令　佐藤小貫塚越の三教諭は今回西筑摩郡准教員養成所教授を囑託せられたり（三月三十一日）

○任命　今回左の通り任命ありたり
一年級主任を命ず　佐藤教諭
庶務會計部顧問に任命す　三溝書記

○告別式　四月廿八日午後二時より講堂に於て武居助手の告別式を擧ぐ校長の告別の辞高橋生徒總代の送辞武居助手の挨拶ありて式を終れり、武居助手は大正六年來本校に奉職せる者にして今回愛知縣加茂郡秋田木材會社に赴任することとなりしなり

○任命通學生監督として左の任命ありたり
通學生監督ヲ命ズ　西澤教諭
同　佐藤教諭

○參觀　五月一日宮崎縣立宮崎農學校生徒約十五名榎並同校教諭引率の下に來校、校內苗圃その他參觀したり

○參觀　五月三日上伊那農學校二年生四十五名渡邊小林の兩教諭に引率せられて來校右同樣種々參觀せり

○實習終了　春季實習は四月二日より開始して五月六日を以て終了せり

○御成年式　皇太子殿下御成年奉祝の式を七日自午前十時講堂に於て擧ぐ、夜は賀意を表する爲め學校職員生徒一同にて提灯行列を擧行せり

○參觀　五月十一日山梨縣立農林學校職員生徒六十一名修學旅行の途次本校を參觀せり

○開校記念日　五月十五日開校日に相當するを以て休業……記念として一學年選手庭球仕合を擧行す、講習生も加はりて益々佳境に入らんとする時雨留遽かに下り來て恨むべし中止の已むなきに至りぬ

○修學旅行　例に依りて三年生は京坂地方

九日間二年生は東京地方七日間の豫定を以て五月十五日早曉修學旅行の途に上る引率教員は三年島田教諭三溝書記、二年中村、小貫教諭被任命二三年同列車に搭乘(名古屋にて東西に分る)出發せるを以て構内又車内の賑ひ一層なりき

會員異動

○加茂憲太郎君 岐阜縣大野郡莊川村六厩第二號六厩保護區官舍に轉勤となれり

○中島信敏君 越後國直江津川端町長野小林區署官舍に轉任せらる

○羽田龍尾君 農商務省山林局を辭し福井縣勤業課に奉職せらる

○宮入汎省君 神奈川縣技手に拜命同縣廳農務課林務に轉任せらる

○皆川秀雄君 入隊中の處今般北海道石狩國札幌郡江別町富士製紙株式會社山林派出所に奉職せらる

○池野萬次郎君 岐阜縣益田郡小坂町大字門坂野尻市助方に在りて實業に從はる

○近藤幸吉君 小坂小林區を辭し鄉里岐阜縣益田郡中之方村にて病氣靜養

○小岩井茂樹君 三ケ月の林業教習を終り試驗も首尾よく合格して今回山形縣北村山郡楯岡小林區署勤務となれり

○矢島武六君 岐阜縣加茂郡役所に轉任せらる)任岐阜縣林業技手)

○柳澤止之進君 松本歩兵第五十聯隊第九中隊に現役兵たり

○鹽澤英一君 青森縣喜良市小林區署に山林技手として在勤せらる

○千村吉雄君 盛岡高等農林卒業今回東京丸ノ内帝林局林務課に奉職せらる

○小田 實君岐阜縣益田郡竹原村乘政御用材伐木事務所に勤務を命せらる

○家高甚一君 鹿兒嶋高等農林學校卒業今回帝室林野管理局技手拜命長野縣西筑摩郡大桑村野尻帝林局木曾支局出張所に在勤を命せらる

○伊深幾太郎君 長野縣下伊那郡上村王子製紙株式會社中部分社下栗伐木所に轉勤せられたり

○等々力官一君 群馬縣利根郡新治村大字布施保護區官舍に昨年五月以降在勤せらる

○都竹武次郎君 宮崎縣兒湯郡西米良村描野三菱社有林事務所に轉せらる

○野澤 博君長野縣林務課に轉任

○中畑佐耕君 高師兵營を辭し青森縣北津輕郡中里村井沼旅館内に轉居せらる

○菊地貞次君 病氣靜養のため青森大林區署を辭し同縣下北郡大畑村本町自宅に轉居せらる

○關琴義君 林業技手及長野縣技手に拜命長野縣廳林務課に勤務となれり

○下平三雄君 臺灣宜蘭廳叭哩沙支廳管内蕃地大平山に轉務せらる

○千田政美君 本縣西筑摩郡技手拜命同郡役所に勤務せらる

○甲田 林君官界を辭し今回樺太大泊町樺太産業株式會社に務めらるることとなれり

○澤柳壽夫君 去る二月中林區署を辭し目下東京市本鄉區駒込神明町八十三近江屋方に居住せらる

○内田新之助君 滋野苗圃官行事終り上田小林區署に歸署せらる

○中澤浩一郎君 長野縣小縣郡滋野村滋野苗圃内に在職せらる

○小松精内君 山形縣最上郡林業技手拜命四月二十三日來勤務

○伊藤喜代君 一月二十五日より四月七日に至る間御料本局にて職員講習を受け今般天鹽國中川郡中川村帝林局中川出張所に轉務せらる

○宮嶋岩見君 和歌山縣東牟婁郡小口村藤田組伐木詰所に勤務せらる

○井上寛一君 留守宇都宮聯隊第三中隊第一内務班に在隊せらる

○星加正雄君 岡山縣福山四十一聯隊第一中隊に入隊せらる

本年度卒業生就職

其の後就職地の決定せる者左の如し

新潟縣新發田小林區署 前野 秀宗
東京府八王子帝林局出張所 吉澤 豐一
岐阜縣廳山林課(同縣林業技手拜命) 大坪 時治
靜岡縣榛原郡上川根村千頭 佐塚 甲子
帝室林野管理局出張所 林 森
東京大林區署測定事務係 小松 義三
岩手縣稗貫郡花卷小林區署 矢島 穣
岐阜縣大野郡莊川小林區署 宮下 武夫
岐阜縣益田郡下呂村名古屋 喜多村 勇
帝林支局下呂出張所 岡庭 泰平
朝鮮新義州朝鮮製紙株式會社 野本 美嘉
本郡王瀧村帝林管理木曾支局御戸川伐木所 糸魚川良二
北海道大夕張三菱炭坑 大久保幸福
朝鮮總督府山林課 福川 正三
青森縣野邊地小林區署
三殿帝林局木曾支局出張所

大正八年五月廿三日印刷
大正八年五月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地 編輯兼發行人 安井正夫
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地 印刷所 長野印刷所
長野縣西筑摩郡福島町五七〇番地 印刷所 長野印刷所
(定價金參錢)